

変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか

—程度性・進展性という概念を用いて—

鈴木基伸 (名古屋工業大学非常勤講師)

要旨

本稿では、「氷が溶けてきた／溶けていった」におけるような、変化的事象を捉え「変化継続」を表すテクル・テイクに焦点を当て、その意味機能を、程度性・進展性という概念から説明できることを論じる。「変化継続」を表すテクル・テイクの違いは、従来テクル・テイクが表す時間軸上の視点の違いに求められることが主であった。しかし、テクル・テイクの用法を巡っては、テクル・テイクが置き換え可能な場合、テクルしか容認されない場合、テイクしか容認されない場合など、前接する出来事の種類によって、様々である。先行研究における時間軸上の視点解釈による説明だけでは、「変化継続」用法におけるテクル・テイクの振る舞いを説明できないと考える。そこで本稿では、テクルは変化の進展後、ある程度に到達する(した)ことを表し、テイクは、変化の進展を全体的に捉えていると考える。テクルが「程度への到達」を、テイクが「進展全体」を表していると考えることによって、従来は説明できなかったテクル・テイクの代替問題について説明できると考える。

1. はじめに

補助動詞テクル・テイクは、空間的移動を表わす場合と、空間的移動を伴わない「変化継続・動作継続」、つまりアスペクトを表わす場合がある。

【変化継続】

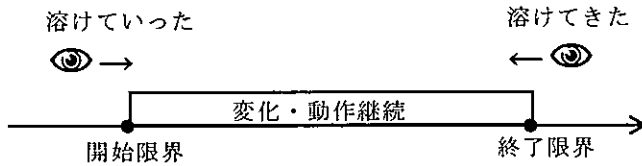
- (1) だが、日がたつほどに胎児は腹の中で大きくなってくる。(越前)
(2) 彼らがシャベルを使えば使うほど、僕の頭の中の空白がどんどん大きくなっていくように思えた。(世界)

【動作継続】

- (3) とにもかくにも、自分は自分なりに励んできた、働いてきた。(楡家)
(4) 私はそう自分に言い聞かせて大学入試のための受験勉強に励んでいきました。(錦)

空間的移動表す場合、テクル・テイクは、その移動の方向性を表し、発話者の場所的な視点の位置によってテクル・テイクが使い分けられる。この視点と方向性の関係は、本動詞「来る」「行く」が表す関係と一致するものであり、移動元に視点を設定すればテイクが、移動先に視点を設定すればテクルが用いられる。一方、空間的移動を伴わない「変化継続・動作継続」を捉える場合、それらの事象は時間軸上に置かれ、テクル・テイクによって時間軸上の方向性が表される。この場合、移動元・移動先という空間的な視点の位置は、「変化継続・動作継続」の開始限界時・終了限界時に投射され、開始限界時に視点を設定すればテイクが、終了限界時に視点を設定すればテクルが用いられる。つまり、時間軸上に置かれたある事態を、事態発生前から眺めた場合はテイクを、事態終了後から眺めた場合はテクルを用いるといつてよい(下

図参照)。



「動作継続」を表わす場合、発話者が任意に設定した基準時に視点が設定され、基準時までの「動作継続」がテキタによって、基準時以降の動作継続がテイクによって表わされる。この場合の基準時は発話時以前に設定することはできても、発話時以降に設定することはできない。

- (5) 私は先月まで一生懸命働いてきた。(基準時＝発話時以前)
 (6) ??私は来年の5月まで働いてくるつもりだ。(基準時＝発話時以降)

従って、「動作継続」を表わすのはテクル・テイクではなく、テキタ・テイクであることがわかる。これらのテキタ・テイクを置き換えることはできず、「動作継続」を表わすテキタ・テイクを用いる際に、どちらが適格であるかという問題は生じない。しかし、「変化継続」を表わすテクル・テイクは、過去及び未来における変化的事象の過程に焦点を当て、過去の変化的事象をテキタ・テイツタ、未来の変化的事象をテクル・テイクによって捉えることが可能である。(7)はテイツタ、(8)はテイクの例であるが、テイツタをテキタに、テイクをテクルに置き換えても文法性は保たれる。

- (7) 今度は二、三枚ずつ小さく賭け、取ったり取られたりしていたが、それでもチップは少しずつ{増えていった/増えてきた}。(一瞬)
 (8) あなたの場合はおなかの傷から先に{腐っていく/腐ってくる}わね、きっと。(世界)

これらは、「チップが少しずつ増える」「おなかの傷から先に腐る」という事態を、テクル・テイクという2つの形式によって捉えることが可能であることを表している。従って、「変化継続」を表わす場合、テキタ・テイツタ、テクル・テイクという形式の意味、代替性、適格性が問題となる。そこで本稿では、1つの事態に2通りの捉え方ができる「変化継続」を表わすテクル・テイクを取り上げ、両形式がそれぞれ具体的に何を意味しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と問題点

「変化継続」を表すテクル・テイクの意味については、これまで時間軸上の視点の位置から説明がなされてきた。森田(1968)は、テクルの場合事態を迎える側に立ち「受け止める気持ち」(森田(1968:85))を、テイクの場合は事態が視点から遠ざかるとして「見送る気持ち」(森田(1968:85))を表すとしている。寺村(1984)も、「事態の変化を時間の線に沿った移動というイメージで捉える」(寺村(1984:163))とし、森田(1968)と同様の解釈を示している。

変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか 一程度性・進展性という概念を用いて一

森田 (1968), 寺村 (1984) のこのような解釈は, 本動詞「来る」「行く」が表す意味, もしくはそこから発生するイメージを時間軸上の事態にそのまま投射しているものであるといえる。また, 吉川 (1973:219) が, 「てくる」は出現の過程を表す動詞につけて用いられて, その過程に具体的叙述を与える。「ていく」は消滅の過程を表す動詞につけて用いられて, その過程に具体的叙述性を与える。」と述べ, テクルと「出現」, テイクと「消滅」に意味的親和性を見出したのも, テクル・テイクが持つ, 「来る」「行く」の意味から導き出されたものであるといえる。このように, アスペクトを表すテクル・テイクの意味解釈は, 本動詞「来る」「行く」のイメージをそのまま当てはめて行われてきたといえる。実際, アスペクトを表すテクル・テイクにもそのような意味合いを認めることができるため, 「来る」「行く」の意味をもとにした考察には妥当性があるといえるが, それだけではテクル・テイクの意味を規定したにすぎず, テクル・テイクのどちらが適格であるかという問題に対して説明を行うことができない。例えば,

- (9) 寒く{なってくる/?なっていく}と, 村では冬の生活の準備が始まります。
(『みんなの日本語中級本冊』)

ではテクルが許容されテイクでは不自然さを帯びるようになるが, これまでの先行研究ではテクル・テイクに関わる容認度の違いを説明できないといえる。また, 渡辺 (2000) は, 「てくる/ていく」を付加した場合は時間軸に沿った段階的な変化のプロセスにフォーカスが当てられている¹ (渡辺 (2000:9)) とし, 瞬間的な事象にテクル・テイクは用いられないとされている²。このように, テクル・テイクによって捉えられる事態には過程性がなければならないことが言及されている²が, 過程性の有無というだけでは, 以下のような例を説明できない。

- (10) 太郎は安らかに{死んでいった/*死んできた}。
(11) 昨日雨が徐々に{降ってきた/*降っていった}。
(12) ○×駅を過ぎると富士山が{見えてきます/*見えていきます}。

(10) の「太郎が死ぬ」という事態が成立するのは瞬間的であり, 過程性が存在するとは言いがたいが, テイクは共起可能でありテクルだと容認されない。(11) (12) における「雨が降る」「富士山が見える」は, 「降り始めた後」「見え始めた後」に過程性があると考えられるが, テイクでは容認されない。このように, 過程性があるかないかの区別だけでは, テクル・テイクの成立要件を十分に説明できるとはいえない。確かにテクル・テイクは過程性に焦点を当て, それを標示する形式であるが, 個々の事態における過程性とは異なるものであるため, 過程性が何を指すかを明確にしたうえで, テクル・テイクが何を標示しているかを考察すべきである。

3. 本稿における考察の対象

¹ 渡辺 (2000:9) が挙げた例を以下に示す。

(i) *信号が赤から青に変わってきた (変わっていく)。

(ii) *ろうそくの火がぱっと消えていく。

² 有田 (2001) も, 考察対象はテクルのみであるが, 「クルに前節する V には一定の持続を可能にする過程性がなければならない。」として, 過程性の必要性を述べている。

本稿で扱うテクル・テイクの「変化継続」用法は、「自然発生現象を表す無意志性動詞に付いた場合」森田（1968:85）に成立するため、無意志動詞（非対格動詞）句によって表されている事態を考察の対象とする³。テクル・テイクが「変化継続」を表す動詞を工藤（1995）の分類に従って以下のように示す。

動詞の種類	例
ものの無意志的な(状態・位置) 変化動詞[自動詞]	温まる, 固まる, 乾く, 腐る, 曇る, 死ぬ, 溶ける, 直る, 老ける
ものの非意志的な動き(現象) 動詞[自動詞]	(雨が)降る, 増える, 減る
思考動詞	わかる
感情動詞	腹が立つ, うんざりする
知覚動詞	見える, 聞こえる, 音がする
感覚動詞	(目が)くらむ, (腹が)減る
関係動詞	意味する, 違う, 似る

また、この他に「形容詞連用形+ナル」「名詞句+ニナル」なども「ものの無意志的な変化動詞」に含め考察の対象とする。

4. テクル・テイクは過程のどこを捉えるか

「変化継続」を表わすテクル・テイクは、事態の非瞬間的な変化に焦点を当てているため、「だんだん」「徐々に」「次第に」「ますます」「どんどん」のような「進展様態型」(仁田(2002:241))の副詞と共起することが多い。

- (13) 一旦そう思いはじめると、きっとそうに違いないと思えてきて、ますます気分が暗くなってきた。(一瞬)
- (14) その姿が夕靄の中でだんだん小さくなっていく。(沈)

また、「進展様態型」副詞が共起していない例にそれらの副詞を付加しても逸脱性を帯びるようにはならない。

- (15) 町の有力者や知識人の中には吟子の博識に驚き、何かと相談に現れる人が{だんだん/徐々に}増えてきた。(花)
- (16) 森で山犬の群れが吠えていた。空気が{だんだん/徐々に}冷たくなっていった。(死者)

このように、テクル・テイク両形式共に「進展様態型」副詞を共起させることができ、両形式

³ 意志動詞であっても、「思わず」「無意識に」「知らぬ間に」などの様態副詞を用いることによって意志性が抑制される場合があるが、そのような事態は考察の対象としない。

変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか 一程度性・進展性という概念を用いて一

の間に振る舞いの違いは見られないと言える。「進展様態型」副詞が表す意味について仁田(2002)は、「時間の展開に従って、事態が進展していき、その進展とともに、事態の内実である変化が漸次的に拡大していくことをあらわしている」(仁田(2002:241))とし、またその性質として、「変化の程度性の拡大という点において、程度量の副詞的でもある」(仁田(2002:241))と述べており、「進展様態型」副詞と程度性との関わりについて述べている。事実、「進展様態型」副詞が容認されるような例に程度副詞を用いることは可能であるため⁴、「進展様態型」副詞を容認するテクル・テイクにおいても程度副詞の共起が認められてもよいと考えられるが、コーパスを見ると、テクルと程度副詞が共起する例は見られても、テイクと程度副詞が共起する例は見られない⁵。

- (17) しかし、一年以上やすんでいる間に、わたくしの心境は、かなり変わってきた。(路傍)
- (18) そうしたら、少しはおまえのお辞儀も変わってくるだろう。(路傍)
- (19) クサキサンスケ長官は、すこし、こわくなってきた。(ブン)

また、テクル文に程度副詞を付加することは可能であるが、テイクに程度副詞を共起させると不自然となる。

- (20) 彼のラバウル滞在の日程も、{かなり/だいぶ}残り少なくなって来た。(山本)
- (21) 月日の経つにつれて、仕える者たちのうち、身分高きも卑しきも、{?だいぶ/?かなり}人数が少なくなっていった。(新源氏)

このようなことから、「進展様態型」副詞、程度副詞とテクル・テイクの共起関係は、以下のようにまとめることができる。

- (22) テクル:「進展様態型」副詞・程度副詞をとる
テイク:「進展様態型」副詞はとるが、程度副詞はとりにくい

「進展様態型」副詞は変化の「進展性」を表し、程度副詞は変化の「程度性⁶」を表している

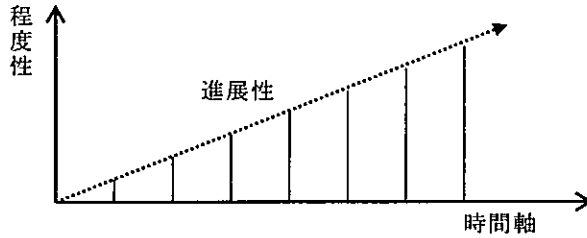
⁴ 「太郎は{少しずつ/少し}太った」「花子は{だんだん/かなり}背が伸びた」など。

⁵ 『新潮文庫の100冊』CD-ROM版を用いて、仁田(2002)が程度量の副詞として提示した「少し」「かなり」「だいぶ」「ずいぶん」「少々」が、テクル・テイクと共起する例を調査したところ、テクルと共起する例はいくつか見られたが、テイクと共起する例は一例もなかった。結果を以下の表に示す。

	テクル	テイク
少し	13	0
かなり	9	0
だいぶ	8	0
ずいぶん	1	0
少々	1	0

⁶ 程度性(gradability)とは主に形容詞や副詞に備わる「度合い(degree)」のことを指す。しかし程度性は形容詞や副詞のみではなく、名詞や動詞にも備わるといえる。動詞(句)を中心に構成される事態の中の程度性は、動詞(句)が示す程度によって表されると考えてよい。動詞に備わる程度性には、

言えるが、「進展性」は「程度性」の拡大によって生じているため、「程度性」を縦軸にとり、時間軸を横軸にとって進展性を表そうとすれば、以下のように図示できるであろう。



テクルが「進展様態型」副詞をとると同時に程度副詞をとることができるということは、テクルは変化が進展した結果ある特定の程度まで到達したことを表していると考えることができる。一方、テイクは「進展様態型」副詞をとることができるが、程度副詞はとれないことから、程度への到達は表さないが、変化の進展を表していると考えることができる。この関係が成立すれば、テクル・テイクは変化的事象の中の異なった部分を表していると考えることができ、先行研究で述べられてきた視点の違いという視点とは異なるアプローチでテクル・テイクを分析することができるといえる。そこで、本稿では、テクル・テイクの機能について、以下のような仮説を立てる。

(23) テクル：変化の中の程度性への到達を表す

テイク：変化の進展性を表す

以下では、この仮説が有効であるかについて検証を行う。

5. テクル・テイクが捉える核事態について

既に述べたように、「変化継続」を表わす際、テクル・テイク両形式によって単一の事象が捉えられる。

(24) 南極の氷が{溶けてきた／溶けていった}。

(25) 風船が{膨らんできた／膨らんでいった}。

これらは、「南極の氷が溶ける」「風船が膨らむ」という事態がテクル・テイクによって捉えられているものであるが、「南極の氷が溶ける」「風船が膨らむ」という事態は、程度副詞、「進展様態型」副詞共に共起可能なことから（「南極の氷が{かなり／だんだん}溶けた。」「風船が{かなり／だんだん}膨らんだ」）、進展性も程度性も有していることがわかる。テクルが「程度性への到達」を表し、テイクが「進展性」を表すとすれば、テクルが捉える事態には程度性が、

上述したような「変化量」「変化度合い」の他に、「持続時間」「回数」の度合いがある。

(i) かなり走った。(動作の達成量) (ii) かなり待った。(持続時間)

(iii) かなり蹴った。(事態の回数) (iv) 彼はかなり怒っていた。(度合い) (以上、加藤(2003:114))

しかし、過程性を有する事態はそのあり方が均一ではなく、変化が進展することによって成立するため、持続時間や回数の程度は問題とならない。したがって、過程性の中の程度は、「変化量」と「変化度合い」に限定される。

変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか 一程度性・進展性という概念を用いて一

テイクが捉える事態には進展性が備わっているはずである。先に述べたように、テクル・テイクは両形式を用いることが可能な場合もあれば、テクルのみ可能な場合、テイクのみ可能な場合もある。本稿の仮説が正しければ、テクルのみ可能な場合、テイクのみ可能な場合における、テクル・テイクが捉える事態は程度性・進展性という性質の有無において違いが見られるはずである。尚、テクル・テイクが表す事態と、テクル・テイクが捉える事態を区別するために、テクル・テイクが捉える事態を核事態⁷と称して考察をすすめる。

5.1. テクルのみ成立する核事態

テクルのみが容認されるのは、「ものの非意志的な動き（現象）動詞」である「(雨/雪/霧雨が)降る」や「思考動詞」の「わかる」「信じる」,「知覚動詞」の「みえる」「聞こえる」などによって表される事態である⁸。

(26) 晴れている空から雨が降ってきた。 (さぶ)

(27) 踏切を渡るとジムの建物が見えてくる。 (一瞬)

(26) (27) のテクルをテイクに置き換えて、テイクによって核事態を捉えようとすると逸脱性を帯びるようになる。

(28) ??晴れている空から雨が降っていった。

(29) ??踏切を渡るとジムの建物が見えていく。

テクルのみが容認されるこれらの核事態は、「空から雨が降った」「ジムの建物が見える」であり、「降る」「見える」は何れも非変換動詞であり、完成点⁹を持たない。そのため開始点以降に進展性の解釈を与えることは困難であり、「進展様態型」副詞は容認されにくいと言える。しかし、核事態が表す状態がどの程度かについて言及することは可能であるため、程度副詞は共起可能である。

(30) a.?空から雨が {だんだん/徐々に} 降った。

b. 空から雨が {少し/だいぶ} 降った。

(31) a.?ジムの建物が {だんだん/徐々に} 見えた。

b. ジムの建物が {少し/だいぶ} 見えた。

⁷ テクル・テイク文における核事態とは、基本的にそれらの文からテクル・テイクを除いた内容のことを指す。

⁸ この他に、「感情動詞」である「いらいらする」「腹が立つ」「あきれれる」,「感覚動詞」である「くらくらする」「疲れる」「頭痛がする」「震える」「痺れる」「疲れる」「(のどが)乾く」「(腹が)減る」,「関係動詞」である「意味する」「異なる」「違う」などもテクルのみによって表される動詞句である。

⁹ ここで言う完成点とは、工藤(1995)が事態の終了を「内的必然的な終了限界」と「任意の終了限界」に分けたうちの、前者に当たる。従って、「内的必然的な終了限界」とは「内的限界動詞(変換動詞)」に備わる時点であり、完成点に到達した時点で事態が成立したことが表わされる。一方、「任意の終了限界」とは、「非内的限界動詞(動作動詞)」に備わる時点であり、事態の成立とは関係ないものである。本稿では、この2つの終了限界をより明確に区別するために、「内的必然的な終了限界」を完成点、「任意の終了限界」を終了点と称する。

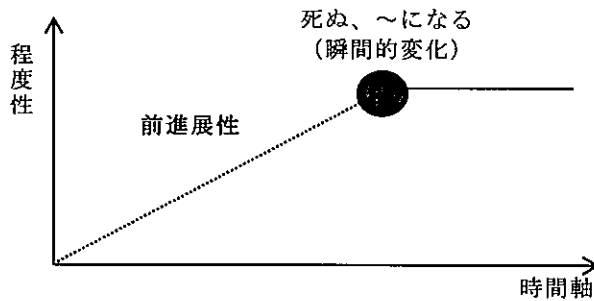
従って、テイクのみによって捉えられる核事態は、程度性は有するものの進展性を有さないと言える。また、これらの核事態は非変化的事象であるため、開始点以降は状態が継続し、終了点（任意の終了限界）は有するものの完成点は持たない。

5.2. テイクのみ成立する核事態

核事態が変化動詞「死ぬ」によって表されている場合、テイクのみで捉えられる。

- (32) a. いったんカリエスにかかると、十年も二十年も寝たままで、やがて痩せ細って死んでいく。 (塩狩)
 b. ??やがて痩せ細って死んでくる。
- (33) a. そうして、七日目の朝、父は平凡に死んでいった。 (忍ぶ)
 b. ??父は平凡に死んできた。

「死ぬ」は瞬間的に成立する事態であるため、始まりもなければ終わりもなく、言わば完成点のみが存在するものである。従って「進展様態型」副詞を共起させ「??{だんだん/徐々に}死ぬ」とすると不自然となる。また、「死ぬ」には程度性が無いため、「??{少し/かなり}死ぬ」というように程度性の解釈も成立しない。このように「死ぬ」には程度性も進展性も含まれないが、「死ぬ」という瞬間的な変化が成立するまでの間に時区間を想定することは可能である。例えば「人が死ぬ」という事態は、事故などで即死する以外はある程度の時区間の中で「体の衰弱」などの進展があると考えるのが自然であり、事態の完成点前の進展性（以下、前進展性）を有していると解釈できる。前進展性を、程度性・時間軸との関係から図示すると、以下のようなになる。



(32) (33) における「死ぬ」の前進展性は「十年も二十年も寝たままで、やがて痩せ細って」「そうして、七日目の朝、父は平凡に」という要素によって表されているのである。「死ぬ」における前進展性の明示は、テイクの成立に関わるものであり、前進展性を表す要素がなければテイクは容認されにくくなる。

- (34) a. 「太郎は昨日眠るように死んでいったよ。」
 b. ? 「太郎は昨日死んでいったよ。」

これは換言すれば、核事態が前進展性を有していれば、テイクによって捉えられることが可

変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか ―程度性・進展性という概念を用いて―
能だということである¹⁰。

5.3. 本節のまとめ

以上のことから、テクルは核事態に進展性がなくても程度性があればそこを標示できること、テイクは核事態に程度性がなくても前進展性が認められればそこを標示可能であることがわかった。これはテクルが程度性への到達を表し、テイクが程度性に言及しないまま進展性を表すとする本稿での仮説を補強するものであると考えられる。以下では、テクル・テイクが実際にそのような意味を持って用いられているかを確認する。

6. テクル・テイクの意味

6.1. テクル文

以下は、何れも程度性への到達に焦点が当てられていると考えられる。

(35) 痛くなってきたらこの薬を飲んでください。

(36) 沸騰してきたら中火にしてください。

(37) 「わからなくなってきたらすぐ聞きにこいよ。」

(35)の「痛くなってきたら」とは、「痛いと思う」程度になったら、ということ、(36)の「沸騰してきたら」は、「沸騰していない状態から沸騰した」という程度になったら、ということ、(37)の「わからなくなってきたら」は、「わからないと思う」程度になったら、ということが表されているようであり、その程度性が強調されているといえる。(35～37)のテクルをテイクに置き換えると、非文法的ではないにしろ不自然となる。

(38) ?痛くなっていったらこの薬を飲んでください。

(39) ?沸騰していったら中火にしてください。

(40) ?「わからなくなっていいたらすぐ聞きにこいよ。」

このように、テイクの場合、テクルで示されたような過程的事象の中での「ある程度に達したら」という解釈が希薄になってしまう。そのため、(38)の「薬を飲む」、(39)の「中火にする」、(40)の「すぐ聞きにくる」ことをするタイミングがいつであるのかが明確ではなくなってしまう。また、テクルは起動相を表すとされる¹¹が、語彙的アスペクト形式であるシハジメルと比較すると、その意味がかなり異なることがわかる。

(41) 【シャンプーが少なくなったのを感じて】「シャンプーが{無くなってきた/?無く

¹⁰ 「死ぬ」と同様に、程度性も進展性も認められないような事態であっても、前進展性が明示されているような場合、テイクで捉えることができる。例えば「恋人になる」は程度性・進展性共に有さない事態だと言えるが(「??かなり恋人になる」「??だんだん恋人になる」)、前進展性が表されていればテイク文にできる。

(i) 僕と莉那の関係は友達の線を越えて恋人になっていった。

(<http://ncode.syosetu.com/n6432d/34/>)

¹¹ 森田(1968)、吉川(1973)、近藤(1985)、益岡・田窪(1993)等参照。

なりはじめた}よ。」

- (42) 【建設中のビルが8割方完成したのを見て】「ビルが{出来てきた/??出来はじめた}な。」

このように、「シャンプーが無くなる」「ビルが出来る」という事態に対して、シハジメルでは不自然となる。なぜなら、(41) (42)において発話者が意味しているのは、「シャンプーが無くなる」「ビルが出来る」という事態が始まったことではなく、(41)であればシャンプーの無くなり始めから無くなってしまいうまでの間において、「シャンプーが無くなった」と発話者が考える「程度」に到達した、ということ、(42)であれば、ビルの建設が始まってからビルが完成するまでの間において、「ビルが出来た」と感じる「程度」に到達した、ということの意味しているからである。一方シハジメルは、事態の始まりの部分に焦点を当てているため、開始部分以降の、ある「程度」に達したことを意味するような場合に用いることはできない。このように、テクルは、発話者がそうであると感ずる程度に達成したことを表しているのであり¹²、出来事の開始部分に言及しているわけではない。テクルの起動相用法は、テクルによって表される過程性の中のある程度への到達の部分、シハジメルが表すような開始限界の付近であった場合に生じる機能であるといえ、程度への到達という意味では本稿が取り上げている「変化継続」用法の延長線上にあるものといえる。前節でみたテクルと程度性の関係、本節でのテクルの意味から、テクルが程度性に焦点を当てていることは明らかなようである。

6.2. テイク文

次にテイクの意味について考察する。(38~40)でみたように、テイクはある程度への到達の表示が要求されているような場合には不自然と感ずられる。つまり、テイクは変化量・度合いといった程度への到達を表しているわけではないということである。テクルが変化量・度合い程度への到達を表し、過程の一部を表すのに対し、テイクは過程そのものを包括的に差し出しているといえる。これは本稿での仮説の基となった程度副詞との非共起関係に見られる。

- (43) 焚き火の火が{徐々に/??かなり}消えていった。

- (44) 貯金が{徐々に/??かなり}無くなっていった。

このように、テイクが程度副詞を容認しにくいのは、進展性の中の特定の程度への到達を意味しないからだといえる。また、テイクは進展性のみ焦点を当て、程度への到達を示さない

¹² さらに、この程度とは絶対的なものではなく、あくまで相対的な程度であるといえる。なぜなら、「シャンプーが無くなった」「ビルが出来た」という程度には個人差があるといえ、発話者によって程度は異なる。

(i) 太郎「シャンプーなくなってきたね。新しいの買おうか。」

花子「まだなくなってきたわけではないわよ。」

このような例からもそれがわかる。また、この程度であるが、あくまで「過程」の中の程度である必要があるため、過程の最中であるという意味合いがなければ、テクルで程度を表すことはできない。

(ii) 【何気なく体重計に乗って】??体重が3キロ減ってきた。

(iii) 【何気なく温度計を見て】??部屋が2度暖かくなってきた。

しかし、これらの程度が過程の最中であるということが示されれば許容される。

(iv) 【ダイエットをしていて目標10キロ減で】「やっと3キロ減ってきた」

(v) 【部屋の温度を5度上げようとして】「今2度上がってきたよ」

変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか 一程度性・進展性という概念を用いて一

め、テイクを用いて最終的な局面まで（終了限界）まで到達したことを表さない。従って以下のような発話が可能である。

(45) 焚き火の火が一旦は消えていったがまた火が大きくなった。

(46) 庭先の雪が溶けていったが溶けきらなかった。

また、「事態成立の完全性」（仁田（2002:198））を表す「完全に、完璧に」や、変化の全体量を表す「全て、全部」なども程度性について言及しているといえるため、共起させると不自然になる。

(47) ??焚き火の火が完全に消えていった。

(48) ??庭先の雪が全部溶けていった。

このようなことから、テイクは事態進展後の終了限界や、過程の中の部分的な程度への到達を表さずに、進展のみを表しているといえる。以上のようなテクル・テイクの用例観察を通して、テクルは程度性への到達を、テイクは進展性を表していることが明らかであるといえる。

7. 検証された仮説による現象の説明

前節における考察の結果からも、テクルが程度性への到達を表し、テイクが進展性を表すという本稿での仮説の妥当性が明らかになったといえる。この結論に従えば、テクル・テイクの成立に関する問題についても答えを示すことができる。(9)を再掲する。

(49) 寒く{なってくる/?なっていく}と、村では冬の生活の準備が始まります。

このように、テイクでは不自然となりテクルが選択されるわけであるが、主節において「冬の準備が始まります」とあるため、テクル・テイクによって始まりの時点が示されなければならない。テクルを用いれば、「寒くなる」という変化の進展の中で、発話者が「寒くなった」と感じる程度に到達することを標示するため、冬の準備を始める時点を示すことができる。しかし、テイクでは程度性に言及しないまま変化の進展性のみを表すため、特定の程度に到達したことは示されず、「冬の準備を始める」という時点を示すことができない。程度性に言及できるテクルの方が主節を導く時点を明らかにできるため、テクルの方がより適格であると判断されるのである。また、テクルが起動相を表しうる一方で、テイクにはそのような用法はないが、これはなぜかといえば、テイクが進展性を表し、過程の中の程度にまで関心を払わないことに他ならない。すでに述べたように、テクルの起動相用法はテクルの程度性への言及から生じる用法である。過程の中の程度に言及し、それが開始部分と一致する場合に起動相を表していると解釈されるのである。しかしテイクでは過程の中の程度にまで言及できないため、開始部分の程度という特定の程度について言及できず、起動相を表すことができないのである。

8. まとめと今後の課題

本稿では、「進展様態型」副詞、程度副詞とテクル・テイクの共起関係から、テクルが程度

性への到達を表し、テイクが進展性を表すという仮説を立て、テクル・テイクの成立別に見る核事態の程度性・進展性の有無や、テクル・テイク文が表す意味から本稿での仮説が妥当であることを述べた。その結果これまでテクル・テイクが持つ発話者の「視点」の違いという観点からは異なったアプローチによってテクル・テイクの意味分析を行うことができたと思う。今後の課題としては、本稿で考察の対象としなかった空間的移動の用法や、「大家が家賃を上げてきた」「相手チームは戦略を変えてきた」などの「行為の受領」(益岡(1997))を表す用法にまで考察対象を広げ、テクル・テイクの用法全体を統一的に説明できるような理論の確立を行いたい。

参考文献

- 有田節子(2001)「日本語移動構文『V-テクル』についての覚書」『大阪樟蔭女子大学論集』38, pp.1-9.
 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 日本言語学会(金田一春彦(編)(1976)に再録 pp.5-26)。
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
 近藤泰弘(1985)「補助動詞『てゆく』『てくる』の用法」『日本女子大学紀要 文学部』34, pp.25-34。
 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版。
 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版。
 益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版。
 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版。
 町田健(1993)「時の分類」『言語』22-10, pp.58-65, 大修館。
 森田良行(1968)『「行く・来る」の用法』『国語学』75, pp.75-87。
 森山卓郎(1987)「方向・移動の形式をめぐって」『語文』49, pp.29-40, 大阪大学国語国文学会。
 吉川武時(1973)「現代日本語動詞アスペクトの研究」『Linguistic Communications』 Monash University (金田一春彦(編)(1976)に再録 pp.157-327)。
 渡辺誠治(2000)『「てくる／ていく」の多様な意味の記述に向けて(試論)』『活水日文』40, pp.1-19, 活水学院日本文学会。
 Bolinger, Dwight (1972) *Degree words*, The Hague : Mouton.

使用コーパス

新潮文庫の100冊 CD-ROM版

安部弘之『山本五十六』(山本), 井上ひさし『ブンとフン』(ブン), 遠藤周作『沈黙』(沈), 大江健三郎『死者の奢り』(死者), 北杜夫『楡家の人々』(楡家), 沢木耕太郎『一瞬の夏』(一瞬), 田辺聖子『新源氏物語』(新源氏), 三浦綾子『塩狩峠』(塩狩), 三浦哲郎『忍ぶ川』(忍ぶ), 水上勉『越前竹人形』(越前), 宮本輝『錦繡』(錦), 村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(世界), 山本周五郎『さぶ』(さぶ), 山本有三『路傍の石』(路傍), 渡辺淳一『花埋み』(花)